

静岡県地域史研究会報

— 静岡県地域史研究会 —

「バンチャア国」の使者

小川 雄

徳川家康が慶長年間に展開した国際外交は、駿府にたびたび外国の使節を迎えさせた。東アジアの朝鮮・琉球、ヨーロッパのスペイン（メキシコ、マニラ）・ポルトガル（マカオ）・オランダ・イギリスなどである。

さらに『当代記』には、慶長十三年（一六〇八）十二月のこととして、「バンチャア国より以使者、駿府大御所江令音信、大御所しやうぎに腰を掛、彼使者有対面、是は船着島、商船往来地也」という記事がある。すなわち、家康が「バンチャア国」から派遣された使者と床几に座して会見したとの内容である。この「バンチャア国」については、ジャワ島のバンテン王国の転訛とする説、「バンツァ」（人の意）を自称していた台湾東部のアミ族とする説がある。

但し、家康は慶長十四年二月頃に台湾の使者不参を理由として、肥前有馬氏に出兵を命じている。前年にアミ族の使者と会見していたならば、かかる理由は示されないはずである。

よって、現段階ではバンテン王国、あるいはボルネオ島南部のバンジャル王国の可能性が高いように感じられる。当時、東ユーラシア全域で加熱していた海上貿易ブーム（大航海時代）は、ジャワ島とボルネオ島にも及んでおり、「船着島、商船往来地」という表現と合致する。

また、バンテン・バンジャルの両王国は、いずれもイスラム王朝であった。その点で想起されるのは、家康のイギリス人側近として知られるウィリアム・アダムス（三浦按針）の経歴である。アダムスはオランダの東

洋遠征隊（リーフデ号はその一隻）に参加するまで、イギリスとモロッコのイスラム王朝であるサアド朝との貿易を扱うバリー商会に勤務していた。家康と「バンチャア国」の使者の会見には、イスラム教徒との折衝について、相応のノウハウを有するアダムスも関与していたと推測してみたとしても、極端な勇み足ではないだろう。

いずれにしても、家康が手がけた国際外交については、東アジアやヨーロッパとの関係にとどまらず、イスラム世界も含めた、より広い視野から検証する必要があると見込まれる。

例会全日要旨

十二月例会

静岡市歴史博物館講座室

十二月二日(土)(一七名参加)

近世における駿府城の実像

増田亜矢乃

駿府には駿府城・久能山東照宮のほか、宝台院、華陽院、静岡浅間神社など徳川将軍家ゆかりの寺社が多く存在する。先行研究は近世初頭の駿府城、久能山東照宮の修築造営を中心に扱っており、直轄地になって以降はあまり触れられていない。直轄地になって以降も建築物の管理は依然駿府に赴任した役人たちに課された重要業務であり、管理状況・体制の把握は直轄地としての駿府の状況を把握することにつながると思われる。

本報告では、上記の問題関心から寛永期以降に駿府で建築物の維持管理を担当した組織、そして享和期・文化期頃の駿府城の状況について考察した。

駿府城は慶長十二(一六〇七)

年に公儀普請によって修築され、その後地震などの被害を受けた際は幕府から命を受けた大名が手伝い普請を行った。しかし、日常的にも建築物の維持管理は必要であり、これを担当したのが駿府破損奉行であった。

『駿国雑志』によると寛永十六(一六三九)年の在番(駿府城内警備隊、大番のち書院番から配属)設置以降、在番から輩出されている。寛永期には通常管理を担う破損奉行2名のほか、宝台院や久能山東照宮で修復が必要になったときには増員が行われたとされ、宝永期まで任命者があげられるが詳細はつかめない。

このようななか享和三(一八〇三)年に勤番組で駿府武具奉行をつとめていた榊原平兵衛が兼帯で破損奉行に任命された。これは前年から城代・町奉行によって進められていた静岡浅間神社の再建と駿府城の大規模修

理による措置であった。破損奉行のもとには城代・定番・町奉行から、それぞれ与力一名・同心三名が出され組織された。建築工事という専門的かつ経験が必要な仕事であり、また膨大で長期にわたる工事が見込まれたからか、彼らは長期にわたりこの職をつとめた。

静岡浅間神社の造営と同時期に幕府に申請された駿府城の修築は、享和2年から交渉が行われ翌年に許可、そして文化元(一八〇四)年に工事が始められた。申請にあたり城代・町奉行が提出した書類には、本丸御殿の屋根の雨漏り・柱の湾曲、坤櫓の大破、草深御門の橋の朽ち落ち、

二ノ丸御門櫓の大破などの状況が記載され、城内全域の建築物が限界を迎えていたことがうかがえる。ここまで放置された要因としては資金面の問題があったようで、近世初頭より幕府から無制限に出されていた工事資

金が年々減額され、維持管理が行き届かなくなつたようである。文化期には駿府で利金運用した資金を投じることでこの問題を解決し幕府からの許可を得ている。

本報告では駿府城を扱ったが、修復資金・組織ともに久能山東照宮や静岡浅間神社など他の建築物も対象としている。これらの管理を一体としてとらえることは非常に重要と考える。また破損奉行とその組織の実働事例の蓄積とともに、城代・町奉行等との関係関係、他の直轄地との比較も視野に入れていきたい。

一月例会

一月二十七日(土) (八名参加)

静岡労政会館五階第二会議室

駿府・清水の米蔵

柴 雅房

本報告は、「駿府御蔵方年中行事・駿府御代官所資料」や天

保六、七年に作成された「駿府御蔵御詰米御用留」など、これまであまり活用されなかった史料に基づき、駿府・清水米蔵の実態について明らかにしたものである。両蔵は「幕府御蔵」（直轄地の年貢米を収納した幕府直営の米蔵）の一つである。幕府御蔵については飯島千秋氏の先行研究がある。

一 駿府御蔵について

駿府御蔵には城内御蔵（六棟十一戸）と紺屋御蔵（二棟二戸）がある。城内御蔵は駿府城二の丸内にあり、東御門の北脇から内堀に続く水路際までの地区を占めている。静岡市の発掘調査により、米蔵の規模、位置（方向）が確認された。堀沿いの多聞櫓にも米が収蔵されていたことが判明している。紺屋御蔵の所在については特定できないが、紺屋町の駿府代官所近くにあったものと考えられる。

城内御蔵は慶長十二年（一六〇七）家康の駿府入城の際には城内に設置されていたものと思われる。紺屋御蔵は寛文元年（一六六一）に設置されたとの記録がある。米の出納はいずれも代官が担当した。

収蔵米の用途は駿府諸役人の俸禄と備蓄米である。俸禄米は原則的に、城内御蔵からは城内関係役人あてに、紺屋御蔵からは城外関連役人あてに払い下げられたようだ。城内御蔵に納められた備蓄米の貯蔵量は基本的に一万俵。天明三年（一七八三）、文政八年（一八二五）には浅草御蔵への補填のために廻送されている。寛政元年（一七八九）からは飢饉に備え、甲州米による粃詰となった。

収蔵米は村々から納められた年貢米である。安永頃と思われる史料によれば、駿府代官がその年に必要な米高を算定した上で、自らの支配地の村々に割り

当て、不足の場合は島田代官、江川代官の駿河・甲斐国支配地に割り当てている。さらに不足した場合は、遠州中泉代官、江川代官の伊豆国支配地に割り当てた。

御蔵から放出される俸禄米（蔵出米）は、市場の狭い駿府にとつては重要な米の供給源であった。蔵出米の減少は米価高騰を招き、町人の飢えに直結した。「駿府御蔵御詰米御用留」からは、天保七年（一八三六）、代官の指示の下、蔵出米を買い集める米商人たちの行動が、飢えに苦しむ町人から買い占めと誤解され、糾弾される状況が記されている。

二 清水御蔵

清水御蔵は常念寺川沿いであり、棟数は六棟（十八戸）。蔵敷地内には船を近づけるための掘割と水門が設けられていた。

清水御蔵は享保十七年（一七

三二）の西国蝗害被害に際し、大坂城などから西国へ送られた米の返済先の一つとして設置された。建設を進めたのは当時の駿府代官山田治左衛門である。以後米蔵の管理は代官が担当した。

貯蔵量は文化・文政期には駿府御蔵と合わせて粃二万石が貯蔵されていたとされる。用途は飢饉等に備えた備蓄米である。古くなった米のみ新米に詰め替え、古米は江戸廻米か入札で地払された。

天明三年には駿府御蔵同様江戸に廻送された。天明七年（一七八七）の駿府の打ちこわしに際には、播磨屋作右衛門手代弥兵衛が清水御蔵の詰米を持ち出し、米五十俵を安売りしたことが判明。財産没収の上闕所処分となっている。寛政元年には駿府御蔵同様甲州米による粃詰となった。天保八年（一八三七）、文久元年（一八六一）慶応二年

(一八六六)には米不足等の理由で駿府の町などに払い下げられている。

〔例会案内〕

☆ 三月例会

一、日時 三月二日(土)

午後三時～

二、会場

静岡県教育会館地階Ⅱ会議室

三、報告者及び報告名

『近世天領の廻米制度について』廻船差配人の動向を中心に 柴 雅房氏

例年ならば卒業論文発表会でしたが、今年は学生の都合がつかず、通常報告となりました。ご了承ください。さらに報告者の柴氏には一月に続いて報告していただくことになりました。

〔事務局より〕

一、報告について

例年より報告者の希望が多く、四月は三島市の平林氏、五月は静岡市歴史博物館の廣田氏

とお二人決まっています。報告希望の方は、六月か七月になりますので、早めに連絡ください。森田の方で調整します。

なお、五月の廣田報告は、企画展示で今川氏を扱うことから、その関連の報告の予定だそうです。

二、歴史随想の原稿募集

報告者の希望と相反して、歴史随想のストックがなくなりました。県内の内容で書ける方はぜひ投稿願います。

三、会誌への投稿依頼

会誌一四号への投稿をお願いします。今年より締め切りを三月末としました。投稿ご希望の方は、早めの投稿をお願いします。

四、原田千尋氏の著書紹介

昨年末に会員の原田千尋氏が著書『今川義元 守護大名から戦国大名へ』を出版されました。地域史研究会で報告され、会誌に投稿されたものや、歴史随想

に書かれたものが多く収載されています。

いずれ書評会を行う予定ですが、原田氏のご厚意で、希望の方には献本いただけるそうです。でも、もし希望される方は、事務局森田がまとめますので、ご連絡ください。

静岡県地域史研究会報 第253号

2024年2月15日発行

静岡県地域史研究会

会長 小和田哲男

事務局長 森田 香司(053)449-5711

会計担当 北村 啓(090)4230-6530

〔会費納入先〕

北村啓気付

郵便振替口座 00880-3-63062

年会費 4000 円(次年度より 3000 円)